Yaita vol.1176 広報やいた 2024 年 12 月号

CONTENTS　目次

２　特集　ワクワク学びは止まらない
１６　地域おこし通信・ヤイタゴハン　ほか
１８　子育てひろば・図書館へ GO ！　ほか
２０　今月のニュース＆トピックス
２４　はつらつ通信
２５　市からのお知らせ
３２　クイズ＆アンケート・編集後記

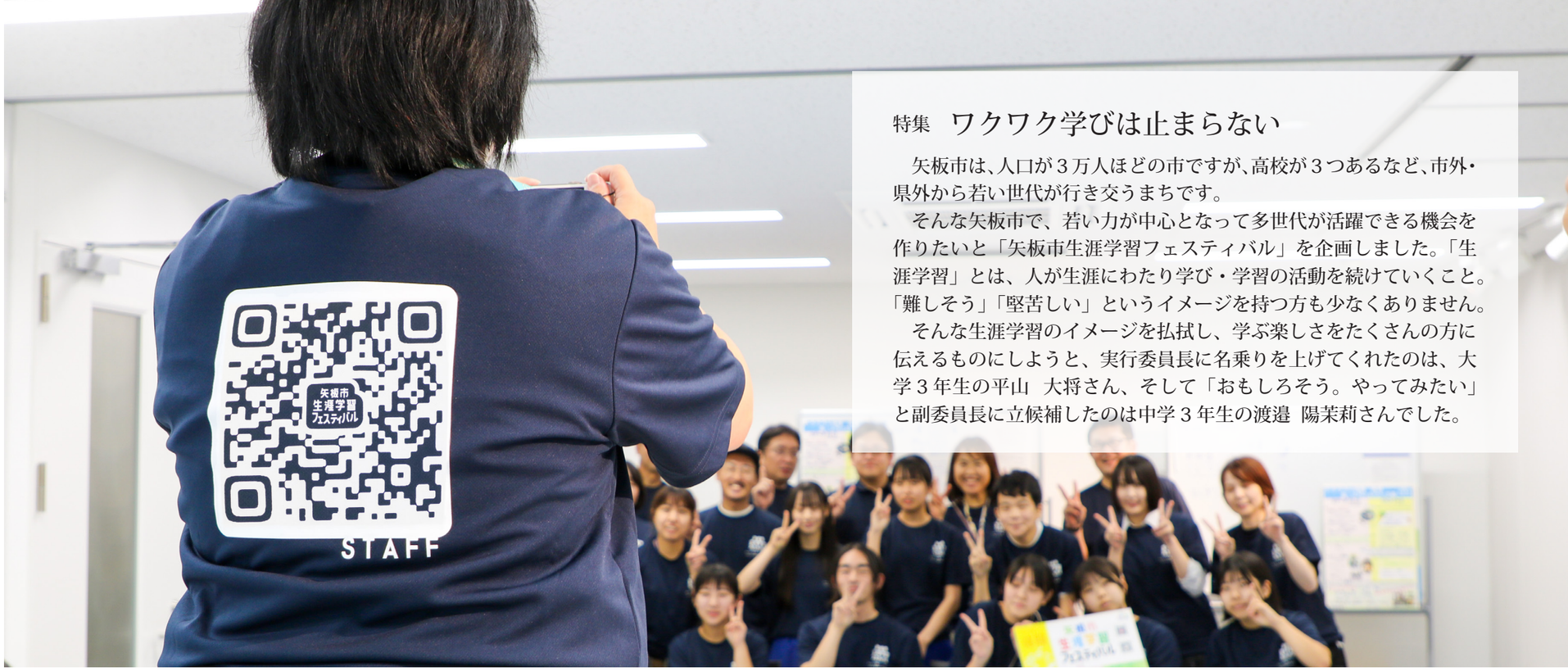
COVER　表紙の写真

表紙の写真は、フェスティバルでストラックアウトを楽しむ参加者の様子です。どの体験ブースでも、つい真剣になっちゃう、つい夢中になっちゃう皆さんの姿が。見てたらやりたくなっちゃう現象も発生し、たくさんの笑顔があふれました。

POPULATION　人口（11 月 1 日現在）

30,140 人　（△76）
男 15,015 人（△37）
女 15,125 人（△39）
13,366 世帯（△25）
（　）内は 10 月 1 日との比較
△は減

出生　10 人
死亡　40 人
転入　44 人
転出　90 人
※住民基本台帳をもとに算出



特集　ワクワク学びは止まらない

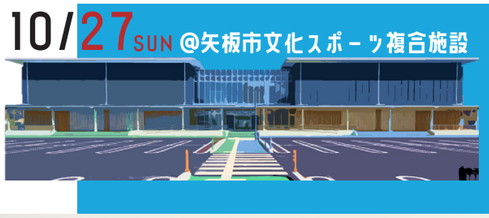
矢板市は、人口が３万人ほどの市ですが、高校が３つあるなど、市外・県外から若い世代が行き交うまちです。

そんな矢板市で、若い力が中心となって多世代が活躍できる機会を作りたいと「矢板市生涯学習フェスティバル」を企画しました。「生涯学習」とは、人が生涯にわたり学び・学習の活動を続けていくこと。「難しそう」「堅苦しい」というイメージを持つ方も少なくありません。

そんな生涯学習のイメージを払拭し、学ぶ楽しさをたくさんの方に伝えるものにしようと、実行委員長に名乗りを上げてくれたのは、大学３年生の平山　大将さん、そして「おもしろそう。やってみたい」と副委員長に立候補したのは中学３年生の渡邉　陽茉莉さんでした。

開催日は10 月27 日、会場は今年４月にオープンした「矢板市文化スポーツ複合施設」。ここは文化会館と体育館の機能を兼ね備え、AI カメラなど最先端の技術を駆使した矢板市の新たなシンボル施設です。新たにスタートしたこの場所を拠点に、市民の皆さんが世代を超えて学び合い、全力でワクワクできる、これまでにないイベントを目指しました。

みんなの「おもしろそう」「やってみたい」を詰め込んだこのイベントは、企画・準備・本番、そのすべてが学びの宝庫。関わった全ての方に、新しい発見や気づきがあり、ワクワクにつながる体験にしようと第1 回実行委員会が始動したのは6 月のことでした ――――― 。



矢板市
生涯学習
フェスティバル

学びはいつでもどこにでもある！
広報紙作りも楽しみたい、ワクワクを一緒に！

広報紙チャレンジ

「一緒に広報紙を作ってみない?」このフェスティバルを取材するにあたり、広報担当としても、学びの多いものにしたいと思い、矢板中央高校新聞部に声をかけました。「がんばります」と快諾してくれた部長の渡邉さん。部員の芳賀さんと共に実行委員として、市の広報担当として、フェスティバルの取材とPR活動をしてくれました。ここでは、新聞部が中心となり取材した、実行委員会の当日までの活動や、メンバーの想いを紹介します。

矢板中央高校 新聞部 部長 2年 渡邉 公喜さん
1年 芳賀 晴乃さん

フェスティバルへの道❶

新聞部、会合に初参加

7月27日文化スポーツ複合施設で、第2回実行委員会が開催され、新聞部を含む実行委員20人が集まりました。

この日は、5つの班に分かれ、当日のブースでやりたいことについて、協議しました。「障害者スポーツのボッチャがやりたい」「仮装してスタンプラリー」など個性豊かなものが数多くありましたが、どの年代でも楽しめるものはどれか、自分がやりたいものなどについて、活発に意見を交わしました。渡邉部長は、「初対面の人と話せるか不安だったけど楽しかった」、芳賀さんは「委員のみんなとたくさん話すことができて、とても有意義だった」と話しました。

フェスティバルへの道❷

欠かせない「大人メンバー」の存在

実行委員会には、地域の大人も参加していて、経験豊富で多才なメンバーがサポートしてくれています。中でも、地域おこし協力隊で多世代につながりが多い四十万さん、全国を飛び回りながら人をつなぐ仕事人・金澤さん、幅広い知識を持ちフットワークが軽いエンジニアの大谷さんは、積極的に会議に参加し、話し合いを見守ってくれています。

大人メンバーも「全力で楽しむ」ことに真剣に向き合い、みんなのアイデアをカタチにするため、当日まで若い世代と共に駆け抜けます。

フェスティバルへの道❸

市役所での定例記者発表に密着

9月27日市役所で報道陣向けの定例記者発表が行われ、実行委員会がイベントのPRを行うということで同行しました。最初に森島市長があいさつし、続いて平山委員長が開催日時や内容などの詳細を、渡邉副委員長がメインイベントであるドラムサークルについて説明しました。各新聞記者から多くの質問が飛び交う中、渡邉部長も質疑応答に参加。「実行委員会で今、どのような悩みや課題があるか」「来場者にどのような気持ちで楽しんでもらいたいか」など、緊張しながらも積極的に質問しました。

フェスティバルへの道❹

委員長・副委員長にインタビュー

実行委員長の平山さんは、市内の自宅から白鷗大学に通う大学3年生です。実行委員会では、客観的な視点からのアドバイスやリーダーシップで、みんなをけん引しています。

先日開催された定例記者発表では、実行委員一同がマラカスやアフリカの太鼓・ジャンベなどを鳴らしながら登場。リズムを刻んで一体感を味わえるドラムサークルの楽しさを表現しながら、フェスティバルの魅力について紹介しました。

フェスティバルに向けては「若い世代をはじめ、小さな子からお年寄りまで、たくさんの方に楽しんでほしい。来場者がそれぞれの体験から何かしらの学びを得て、多世代がつながることができるフェスティバルにしたい」と話しました。

「プレッシャーをいい刺激に変えて、本番を成功させたい」そう話す副委員長の渡邉さんは、矢板東高附属中に通う中学3年生です。持ち前の明るさとエネルギッシュな行動力で委員長をサポートしています。

渡邉さんは中学生の自分に副委員長が務まるのかプレッシャーを感じていたと言います。活動が始まってみると、困ったときは委員のみんながサポートしてくれて、「みんなの気持ちに応えたい」と思うようになったそうです。定例記者発表では「緊張したけど、みんなと一緒だったから楽しむことができた」と話していて、実行委員会メンバーが活動を通じて絆を育み、チーム一丸となってフェスティバルの準備をしていることが伝わってきました。

「来てくれた方の期待を、いい意味で裏切れるようなフェスティバルにしたい」と話す渡邉さん。本人もたくさんの学びを得ながら、当日の成功を目指します。

フェスティバルへの道❺

詳しくはこちら

とちぎテレビ・イブ6プラスに出演

情報番組イブ6プラスの「やいた大好き」というコーナーでフェスティバルの紹介をするということで、10月11日に行われた収録に同行しました。やいた応援大使・だいじさんに概要を紹介し、ドラムサークルにチャレンジ。たまたま来た小学生も飛び入り参加するなど、即興で、誰でも楽しく盛り上がれるフェスティバルであることをみんなでPRしました。

フェスティバルへの道❻

持続可能なフェスティバルに

フェスティバル当日、片付けがひと段落した平山さんに今の想いを伺うと「みんなが楽しんでいる姿を見ることができて、うれしかった」と笑顔を見せてくれました。「会議に参加できないことも多く、委員長不在の時がたくさんあった」と話す平山さん。「実行委員のみんなが、積極的に動いてくれたおかげで、無事運営ができた。みんなの協力と行動力のおかげ」と実行委員会メンバーへ感謝を伝えました。

「次は、より若い世代が矢板市を支えていけるよう、新メンバーを巻き込んで、たくさんの方に経験を積んでもらいたい。地域を元気にする若い世代を育てつつ、地域の大人側としてサポートしていきたい」そう話す平山さんのまなざしは、来年のフェスティバルを見据えていました。

広報紙チャレンジを終えて　矢板中央高新聞部

新聞記者と肩を並べて質問したり、テレビ収録の機材を間近で見て感動したり、ワクワクすることが次々と起こり、楽しかったです。取材では、実行委員メンバーの熱意に刺激を受け、自分たちも一員として、みんなのためにがんばりたいと思いました。取材という形ですが、少しでもみんなの役に立てていたらうれしいです。

学びはいつでもどこにでもある 2
ワクワクが伝染した！

けん玉チャレンジ

体験ブースとして準備していたけん玉体験。「できた!」という喜びが癖になり、実行委員会では、ついついやっちゃう現象が多発。そこで、この楽しさをみんなに共有したいと思い、インスタグラムでけん玉チャレンジが始まりました。投稿を見た子が、「ちょっと私にも」とか、「大技できるよ、やらせて」など――。

カウントダウンのつもりで始めたけん玉投稿は、大きな反響を呼び、たくさんの人を笑顔でつなぎました。１回でできてびっくり笑顔、やっとできて安心笑顔、大技ができてどや顔！からの笑顔。けん玉チャレンジは、カウントダウンと共にワクワクをつなぎ、家族・友達・職場・地域に笑顔を広げる活動となりました。

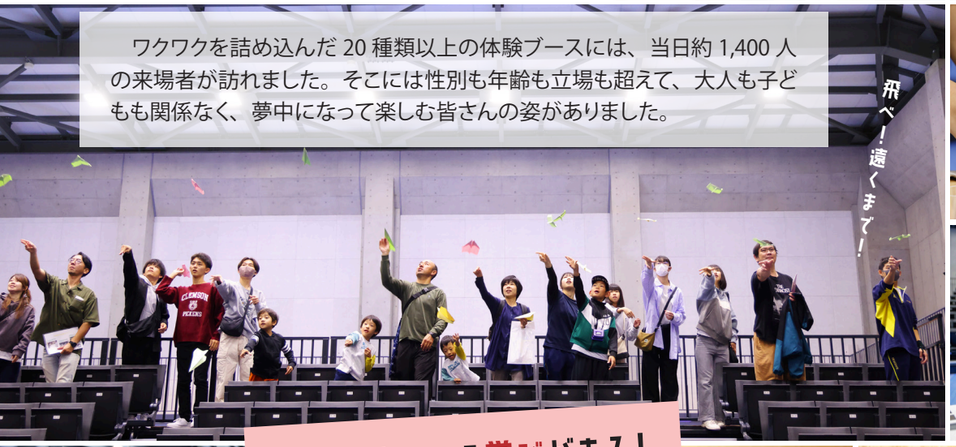
つながった笑顔は
２００人以上！
みんなの笑顔最高！

紹介しきれなかった動画は
こちらから
矢板市生涯学習
フェスティバル実行委員会
y.show.fes24

インスタグラム

学びはいつでもどこにでもある 3
ワクワクをみつけよう！楽しみ方はあなた次第

体験ブース



ワクワクを詰め込んだ 20 種類以上の体験ブースには、当日約 1,400 人の来場者が訪れました。そこには性別も年齢も立場も超えて、大人も子どもも関係なく、夢中になって楽しむ皆さんの姿がありました。

遊びの中にこそ学びがある！

全力で楽しむ！

スポーツ吹矢は腹式呼吸を使ったスポーツで、健康法としても注目されていて、中高年を中心に人気のスポーツです。私は、スポーツ吹矢と出会い、その楽しさに魅了された一人として、見ているだけでは伝わらないその楽しさを知ってもらいたいと思い、体験ブースに参加しました。当日は小さなお子さんから大人まで、たくさんの方が「やったことない」「やってみたい」ということで体験してくれました。「もう一回やりたい」と、何回も夢中になって挑戦しにきてくれる子などもいてうれしかったです。

何よりも楽しくなければ吹矢じゃないと思っています。自由に楽しむ皆さんの笑顔に出会えて、ブースを出した甲斐がありました。「もっとやりたい」「上達したい」と思った方はいつでもご相談ください。

詳しくはこちら

スポーツ吹矢振興協会
矢板ながみね支部長
湯澤 正樹さん

やってみなきゃわからない とにかく一回吹いてみて！

私たちは普段、小学校の家庭科の授業でミシンボランティアをしています。「ミシンでつなごう」のブースでは、布のはぎれをミシンで縫いつなげ、長い一枚の布にして、会場のデコレーションにチャレンジしました。子どもだけでなく大人も「おもしろくなっちゃった!」と熱中して取り組んでいる姿が新鮮でした。休む時間もないほど忙しかったけど、中高生ボランティアが一生懸命協力してくれて、楽しく過ごせました。

当日、参加した方のひらめきからヒントをもらい、デコレーションを急きょアレンジしました。そのおかげで会場がより一層華やかになりました。やってみて気づくこと、話してみてわかることがあって、歳を重ねていても、まだまだ学びがたくさんあるものですね。

坂巻 公子さん　長谷川 麻樹子さん

いくつになってものびしろだらけ！

学びはいつでもどこにでもある 4
こんなすごい人いるの？

ステージ発表

ステージ発表は、全国や世界で活躍している地域の方たちを、皆さんに見てほしいという想いから企画。普段は市外・県外で活躍している発表者の皆さんは、地元で披露できる喜びと共にステージを楽しみました。

学びはいつでもどこにでもある 5
その発想はなかった！そんな視点から調べたの？

アカデメイアやいた

市内の中高生が、「総合的な学習の時間」や「探求の時間」で調べたりまとめたりしたことを、地域の方に向けて発表するステージ企画。市の名産であるリンゴを使ったまちおこしの提案やSDGsについて、文化スポーツ複合施設の場所に関わる歴史を探る研究など、中高生ならではの発想から生まれたユニークな発表に、市長をはじめたくさんの大人たちが聞き入りました。

中高生による研究発表

「消滅可能性自治体・矢板市を、脱却するには」
矢板中学校

「目標達成に必要なこと」　片岡中学校

「リンゴで YAITA 埋め尽くせ」
矢板東高附属中学校

「矢板市のリンゴをもっと知ってもらうためには」
矢板東高附属中学校

「JT 跡地から探る矢板のたばこ産業」
矢板東高校　リベラルアーツ同好会

近年、キャリア教育が推進されていますが、地域について考えることもキャリア教育の１つです。

生涯学習とは、すべての世代が自分のため、周りの人のため、地域のために学び続けることであり、学んだ事を生かすことです。小学生が、または中学生が「自分たちが地域のために何ができるのか」ということを考えることが、地域人としてのキャリアを積むことにつながり、生涯学習のスタートとなります。学生だからできること、子育て世代になってできること、シルバー世代にできること、それぞれの世代を生きる中で、地域とともに生きることを考え、つながっていくことが潤いのある人生を創り出します。

今回の研究発表では、中学生の視点でまちの活性化について真剣に考えたり、高校生が古い矢板市の地図から感じた疑問をたどって、その歴史を紐解いたりしました。大変興味深く、感心して拝聴しました。このフェスティバルの良い点は、その研究成果を校内だけでなく、地域の方に伝える機会となったことです。発表者にとっては経験と自信になり、地域の方にとっては新たな矢板市を知る「気づき」や「学び」につながったのではないでしょうか。

また、フェスティバルの企画を若い力に託したことも良かったと思います。課題があった時、私たち大人は知識や経験、組織を使い解決方法を見い出します。若い世代にはそのような要素がない分、発想とアイデアで乗り越えます。彼らには彼らのやり方があり、次世代を担う彼らに委ねたことは、彼らにとっても、地域にとっても良いキャリア教育になったことでしょう。

情報化が進み、変化の激しい現代社会において、このような表現力や対応力が未来を生き抜く力につながります。フェスティバルの開催を通じて、その力を地域が共に育み、共に学ぶ矢板市の姿に、明るい未来を見い出す頼もしさを感じました。

白鷗大学教育学部長
教授 金井 正さん

「今の自分にできること」は「今しかできない学び」

学びはいつでもどこにでもある 6
みんなと一緒だと楽しい、みんなで作り上げよう！

中高生ボランティア

前日までの会場準備や当日の片付け、体験ブースのお手伝いなどの作業を担う中高生ボランティアを募集し、のべ114人が集まりました。「この作業、こうした方が早くない?」「実際はこの方が便利かも」「分担を決めて流れ作業にしよう」など。そこには、やってみてわかった「気づき」や「発見」を共有し、学び合いながら作業する姿がありました。

私は、８月上旬から留学生として矢板東高校に通っています。留学中にいろいろな経験を積みたいと考えていたところ、学校からボランティアの案内があり申し込みました。人と関わることはワクワクするし、イベントの助けにもなれるなら一石二鳥だと思いました。

当日は、ボードゲームの体験ブースを担当しました。その中で、３歳くらいの小さな子にルール説明をしたのですが、なかなか伝わらず、伝え方を変えて何度も説明しました。「わかった！」と言ってくれた時はうれしかったです。ゲームを楽しむその子の笑顔を見ることができて、参加してよかったと心から思いました。

最後は、友達と一緒にドラムサークルに参加できて良い思い出になりました。見たことのないアフリカの太鼓・ジャンベにもワクワクしたし、みんなとリズムを合わせることが、こんなに楽しいとは思いませんでした。

矢板東高校１年
河越 瀬成 ノエルさん

**笑顔をみると元気がでる！
人と関わるっておもしろい！**

中学生実行委員に聞いてみた！フェスティバルどうだった？

矢板中学校３年
野澤 寧々さん・八木澤 沙彩さん

新たな「つながり」をこれからも

フェスティバルについて興味を持ってもらうためには、とにかく周知が大切だと考えました。そのため校内や出身小学校、近所のお店などいろいろな場所にポスターを貼ったり、掲示をお願いしたりしました。また、ボランティア募集は先生に相談して、校内放送や全校集会で周知する時間をもらって全校生徒に呼びかけました。その甲斐あって、当日たくさんの矢中生がボランティアに参加してくれたことがとてもうれしかったです。実行委員会では、違う中学校に友達ができたり地域の方と触れ合ったりして、新たな「つながり」ができました。このつながりを大切に今後も切磋琢磨していきたいです。

矢板東高校附属中学校３年
藪﨑 唯さん・井上 莉望さん

誰よりも矢板市を楽しむ

私たちは市外から通学していますが、「大好きな学校がある矢板市のためになるなら」と思い、実行委員に申し込みました。でも、なにより「楽しそう!」と思ったのも事実です。

会議や打合せは、すべて出席するつもりで参加しました。毎回いろいろな課題や問題がありましたが、その都度調べたり考えたりして、自分たちなりの答えを出して皆さんに相談してきました。毎回違った遊びや学びがあり、新鮮ですごく楽しかったし、けん玉も上達しました。

結果的に私たちが一番楽しんだのではないかと自負しています。

「矢板市、大好き!!」

片岡中学校２年
長沢 千歳成さん

ボランティアって楽しい！

片岡中メンバーで「クイズSDGs」というブースを出しました。SDGs調査団の一員となって、会場内にあるSDGsクイズを解きながら答えを探すアトラクションブースです。ほかのブースとは違うものを目指し、ネットなどで調べて、構想から小道具まで一から準備しました。

当日は、大人の方も参加してくれて「おもしろかったよ」と声をかけてくれた時はうれしかったです。今回の経験で、自分はもっとボランティア活動に積極的に取り組みたいんだということに気づきました。自分にとって進むべき道が開けた大きな分岐点になりました。

ドラムサークルでつながった みんなの「ワクワク」

ドラムサークルとは

参加者が輪になって即興で作り上げる打楽器・パーカッションのアンサンブル。ファシリテーター（ガイド役）に合わせて演奏が発展する中で、みんなが一体感を共有できる参加型音楽レクリエーションです。

ココロオドル、夢中になる何かに出会えるまち

次から次へとやりたいことやユーモアなアイデアがあふれ、天真爛漫に楽しむ若い世代。若者と一緒の目線で真剣に楽しみ、いざという時に頼りになるかっこいい大人世代。いつだって穏やかな笑顔で包み込み、やさしく手を差し伸べてくれるシルバー世代。

フィナーレのドラムサークルでは、そのすべての世代が同じリズムを刻み、心一つになって大団円を迎えました。

企画・準備から本番まで、たくさんの笑顔とともに前に進めてきたその道のりには、世代を超えてみんなが学び合い、楽しみ合う姿が見られ、「矢板っていいまちだな」という声が聞こえました。

新しい出会いから生まれたつながり、チャレンジしてわかった気づき、一緒に過ごすことの楽しさ、一緒に笑ったときの一体感 —— 。

あなたをワクワクさせる何かは、実はすごく身近にあるのかもしれません。

「このまちの可能性は、まだまだ計り知れない —— 。」

あなたも、夢中になれる何かに出会うため、このまちに向き合ってみませんか。

一人ひとりがワクワクする何かを見つけ、そのワクワクを誰かと共有した時、それがこのまちの原動力になるのかもしれません。

SPECIAL THANKS

フォトグラファー／たかはし じゅんいち

ご縁がつながり、会場に来てくれたフォトグラファーたかはしじゅんいちさんが、当日の写真撮影をサポートしてくれました。掲載しきれなかった会場の様子は、「山﨑」が奏でる曲とともに、こちらからお楽しみください。